

# 商店街モデルノロジー

## 東京の商店街形成史。

ひと口に商店街と言えども、神社仏閣の参道として賑わうもの、鬧市の残り香がするものなど、成り立ちは分かれる。江戸東京の町の発展とともに変容する、商店街の姿を追う。

### 都

内には商店街が千八百程度あると言われている。これらの商店街の形成史を紐解きながら、個店の魅力の集積以上の、商店街そのものの形や、立地が発する魅力に接近していきたい。

町人地に商店が散在していた江戸期に例外的に多数の商店が連なっていたのは、有力な寺社の門前と、起点となる日本橋地域や宿場町を中心とする主要街道の沿道であった。寺社に向かう求心的な構造、街道という強力な軸を持つ構造は、時間を経ても消えることなく継承されてきた。おそらく都内の商店街で最も古い起源を持つのは、こうした「寺社門前商店街」と「主要街道筋商店街」である。

明治維新後、東京はいったん、江戸

の最盛期の半分にまで人口を減らしたが、産業近代化の成功を受けて次第に人口を回復、増加させていった。その過程で、一方では桑茶畑などに転用されていた武家地の宅地開発が進み、一方では旧江戸市中で収まりきれなくなった人口が周辺町村に染み出していった。特に明治末期以降、東京市電の路線網の充実と合わせて、新開町の中心街路、旧農村部の古い道筋や停留所近辺などの、何らかの交通至便の地に、増加した近隣人口の生活を支える商店街が生まれた。これが現在、主に山手線内や中央区、台東区などに散在する「独立近隣商店街」の起源である。

大正十二年の関東大震災後は、東京は山手線ターミナル駅を起点とした郊外鉄道の駅を中心として鉄道沿線に急

中島直人、初田香成 文  
text by Naoto Nakajima & Kosei Hatsuda

### 参拝者で絶えず賑わう 寺社門前商店街。

寺社という求心力のある核を持ち、どこか伝統的な雰囲気漂う商店街。直線的な参道の両側に店舗が連なる形が典型だが、複数の参道によって面的な様相を示す場合もある。

例えば、浅草寺を中心とした浅草(台東区)は、江戸三座の立地、浅草公園の開設、六区興行街の成立を経て巨大な盛り場となったが、個々の商店街に着目すれば、震災復興建築である仲見世商店街、戦後いち早くアーケードを採用した新仲見世商店街、近年店舗のファサードを江戸風到大改修した伝法院通り商店街など、個性的な商店街が多数競い合う商店街博覧会状態を楽しむことができる。

速に広がっていき、この市街化に応じた「近郊駅前商店街」が誕生した。一つ一つの商店街の潜在的な商圏は広く、後に大規模な商店街に成長していったものも多い。

その後、戦中、終戦後の物資統制の影響で既存の商店街が停滞を余儀なくされるなか、間隙を縫って現れたのが鬧市であった。この鬧市が商店街の復興以降もさまざまな形で存続し、強烈な個性を持つ「鬧市発展商店街」を形成していった。

一九六〇年代以降、東京は戦前をはるかに凌ぐスピードで増加する人口に

対して、郊外部の大規模団地の建設での対応を試みた。その団地内では商店街もコミュニティ施設として当初から計画的に設計、配置された。これが「計画配置商店街」である。

実際には以上の六つのタイプが重なり合って現在の姿をつくりだしているケースが多い。また、大学や病院、工場などの近代施設が誘引した「近代版門前商店街」や大正末期から昭和戦前期にルーツを持つ「公設・私設市場継承商店街」などもある。そのことを念頭に置いて、自分の足で個々の商店街の形成史を歩いてもらいたい。●(中島)

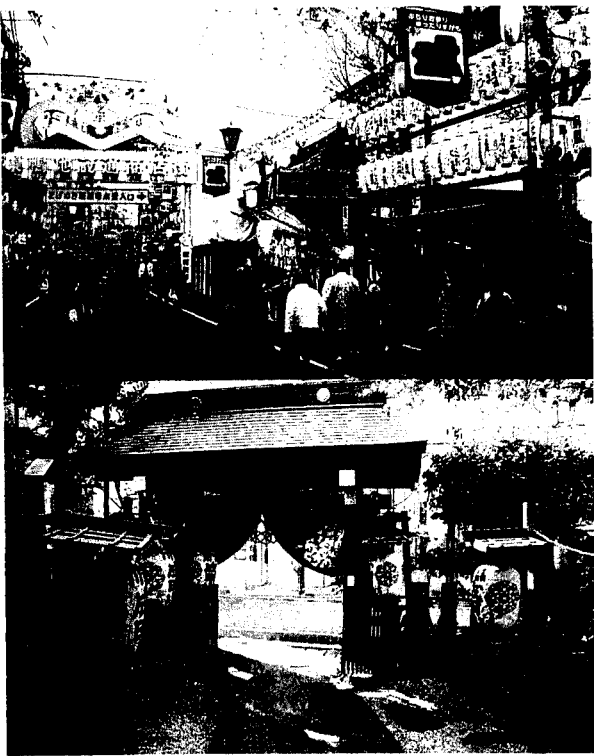
### 線状に長く連なる 主要街道筋商店街。

江戸四宿(品川、内藤新宿、板橋、千住)を中心に街道筋に展開した商業集積を起源とする商店街。線状に長く連なるのが特徴で、旧街道とは別に新たな広幅員街路が作られた結果、昔ながらの風景が残っているとところも多い。一方で、幹線道路沿いに賑わいが移ってしまったものもある。

旧中仙道では巣鴨地蔵通り商店街(豊島区)から、かつての板橋宿の板橋本町商店街(板橋区)まで、七つの商店街が三千口強にわたり連続してい

る。もともと板橋宿と庚申塚に商業集積があったものが、明治期以降の東京の拡大の中で発展、連続したもので、適度な間隔で現れる昔の商店街建築が目飽きさせず、長さのわりに歩いてしまふ。

この他にも旧東海道沿いには、かつての宿場町である北品川と南品川、そして青物横丁、鮫洲(いずれも品川区)と、適度なスケール感を残した商店街が、昔の海岸線沿いに湾曲して並んでいる。日光街道と奥州街道の最初の宿場町だった北千住では、かつての街道筋は新たな日光街道と駅前挟まれ、若干窮屈そうだ。●(初田)



上・おばあちゃんの原宿、巣鴨地蔵通り商店街(写真・渡邊茂樹)。  
下・旧東海道にあたる北品川商店街にある一心寺(写真・大西みつぐ)



夕暮れ時の  
鬼子母神通り商店街を  
走る都電(写真・渡邊茂樹)

浅草寺の参道、浅草仲見世商店街。  
東京の中でも、歴史が古い商店街の  
ひとつ(写真・鈴木知之)



商店会として日本で2番目に長い歴史があると  
言われている、台東区台東の佐竹商店街。  
ふくろうがマスコットになっている(写真・川島保彦)

## まち歩きのお楽しみ、 独立近隣商店街。

かつての江戸市中や、明治から震災復興期までに宅地化した周辺部に形成された、鉄道駅や幹線道路といった現在の交通ネットワークへの依存度が比較的小さい商店街。

かつて山手線の内側及び中央区、台東区の至るところに存在したが、寂れてしまったものも少なくない。谷筋などの特徴的な街路沿いに存在するものも多いが、まち歩きにおいて予告なしに現れるのが特徴である。

明治初年に武家地が開発されて各地にできた「新開地」と呼ばれる商業集積のうち、佐竹商店街(台東区)は現在まで賑わいが持続している例である。柳町通り商店街(文京区)は旧武家地に明治期以降形成された小さな商店街である。近年再開発が進み、高層マンションの建ち並ぶ街となったが、その足元で頑固に頑張っている。

日の出優良商店街(豊島区)は震災復興期に緩やかに蛇行する谷筋に形成された商店街で、震災がなかったこともあり、サンシャイン60の裏手で、今現在もゆっくりとした時間を刻んでいる。●(初田、中島)



上・豊島区東池袋にある、日の出優良商店街(写真・中島直人)  
下・文京区小石川にある、柳町通り商店街(写真・川島保彦)

## 今でも匂いをとどめる 闇市発展商店街。

終戦後に鉄道駅前の空き地(多くは戦前の強制疎開跡地)などに発生した闇市に起源を持つ商店街。闇市は当時マーケットと呼ばれた長屋式の木造バラック建築と、公道上で営業していた仮設の露店からなる。後に露店は整理され、マーケット形式の建物に入居

する。

基本的に一つの建物を共有し、間口の狭小な店舗が連続しており、イスマ諸国のバザールのような雰囲気も漂わせる。またその狭さから現在は飲み屋が多いのも特徴。闇市のDNAは強烈で、移転しても再開発されてもその雰囲気は必ずどこかについて回る。アメ横商店街(台東区)は上野と御徒町の間の闇市に起源を持つ複数の商業組織から構成され、闇市発展商店街の中では現在、最もにぎやかである。周囲の建築の間をすり抜けるように建物が作られた結果、思わぬところに出してしまうことも。

新橋駅西口のニュー新橋ビル(港区)は、闇市に起源をもつ最大規模の飲み屋街を再開発して建設された。営業者の運動で、迷宮性を持つ空間に設計が変更された経緯を持つ。●(初田)



左・上野駅と御徒町駅の間をつなぐアメヤ横丁(写真・川島保彦)。  
右上・闇市に起源を持つ飲み屋街を収容して発展したニュー新橋ビル(写真・渡邊茂樹)



左・東急目黒線武蔵小山駅の南側に続く、武蔵小山パルム商店街(写真・渡邊茂樹)。  
右・JR中野駅の北口に延びる中野サンモール(写真・川島保彦)

## 鉄道の発展史と 歩を合わせる 近郊駅前商店街。

関東大震災後の市街地の膨張に合わせて、郊外鉄道の鉄道駅周辺に生まれた商業集積を起源とする商店街。その規模や形は鉄道駅の駅勢圏の影響を受ける。似た規模の鉄道駅が等間隔で並び中央線沿線では、各駅を中心として北と南に駅前商店街がきれいに揃う。例えば中野駅の北口に延びる中野サンモール(中野区)は、昭和四年、震災後の駅周辺の人口の増加に伴って手狭になった駅舎の改築をする際に、位

置も新宿寄りに移したことがきっかけで生まれた駅前商店街である。中野駅前から脇目も振らず真っ直ぐに北上する駅前商店街の優等生である。

また、鉄道駅密度の濃い品川区内の東急沿線地域では、各駅前商店街同士が連結して一大商業回廊ネットワークを生み出している。例えば、戦前から熱心に商店街事業に取り組み、現在でも近隣商店街では都内一、二の規模を誇る武蔵小山パルム商店街(品川区)を抜けると、そのまま「直線」で日本一長い商店街」と自称する戸越銀座商店街(品川区)に連結している。●(中島)



昭和38年に完成した赤羽台団地の、棟の1階に作られた商店街(写真・渡邊茂樹)

## 団地開発の一環としての 計画配置商店街。

新たに建設された団地や住宅地に計画的に配置された商店街。戦前の同潤会アパートに併設された商店などにルーツを持ち、高度成長期以降の郊外の大規模団地やニュータウンに、居住者向けのコミュニティ施設として設置された。基本的にすべての店が同じ時期に業種調整を経て入居するのが特徴で、団地居住者の高齢化とともに客足も減りつつある。

昭和三十八年に完成した赤羽台団地(北区)は、団地に住むことがステータスだった時代に、二十三区初の大規

模団地としてモデル的に計画された。敷地北側中央に長大な七階建ての高層棟が中庭を囲い込む形で配置され、商店街はその一階に集約的に設置されている。

高島平団地(板橋区)は昭和四十七年に入居が開始された典型的なマンモス団地で、比較的都心に近かったため人気を呼んだ。ご多分に漏れず商店街の空洞化、住人の高齢化、建物の老朽化などに悩んでいるが、近年、近隣の大学が参加して地域通貨やコミュニティイカフェの実験が進められている。●(初田)

# 文化財にしたい 商店街建築。

バブル期の再開発で、次々に消えていった商店街建築。町の歴史や記憶が建物とともに失われる前に、少なくともこの姿だけは、とどめてほしいと願う。



上・月島西仲通り商店街の看板建築。アーケードで見づらいのが残念。  
下・渋谷の道玄坂に並ぶ看板建築。崩落防止のネットがかけられている (写真・初田香成)

## 看板建築を 街並みとして 守りたい。

戦前期の看板建築は現在では数が少なくなり、残っているものもほとんどは「点在」しているに過ぎない。そうしたなかで月島西仲通り商店街(中央区)の看板建築の並びは往時の商店街の「街並み」を今に伝える貴重な存在である。アーケードで見えにくくなっているが、「なんでもや」や「オモチャ」

の文字がいい味を出している。またラシャ間屋である海老原商店(一九二八年築)を中心とした神田須田町(千代田区)の柳原通りの鋼板葺きの看板建築の並びも見事である。江戸期以来の古着屋を中心としたかつての商店街の威容を今に伝えている。なお渋谷道玄坂にもマンサード型の屋根を模したファサードを持つ看板建築の並びがあるが、現在、既にネットがかけられている。(中島)



神田須田町の柳原通りに並ぶ看板建築。これほど連続するのは都内でもめずらしい (写真・渡邊茂樹)

## 共同建築の走り、 震災復興RC。

東京市営店舗向住宅は一九二八年築。震災前は三菱財閥の岩崎家の経営する木造の店舗長屋が並んでいたが、震災後に東京市によって鉄筋コンクリート造で建て替えられた。戦災で躯体を残して焼けるが、再建されている。当時、区分所有権の概念はまだなく、その後の商店街共同建築の走りであった。エチソウビルは一九二四年築。名前は施主の越前屋惣兵衛から。(初田)



上・清澄通りにある東京市営店舗付住宅 (写真・渡邊茂樹)。  
左・本郷通りの商店街にあるエチソウビル (写真・川島保彦)

## 戦後復興の シンボル、 マーケット。

吉祥寺のハーモニカ横丁は闇市起源を持ち、狭い間口の店が建ち並び様子から命名された。当時の闇市は配給物資が払底するなか、復興への活力のシンボルでもあった。近年はその独特な雰囲気ひかれ、モダンな店が入居するなど再生が進んでいる。下北駅前食品市場も同様な経緯で建設されるが、こちらは道路建設計画により消滅の危機に瀕している。(初田)

右下・下北沢駅前食品市場。食料品のほか、立ち飲み屋などもある。  
下・新旧の店が入り混じる、吉祥寺ハーモニカ横丁 (写真・川島保彦)



# 初音小路



## 味わいのある 露店収容施設。

一九五〇年の露店整理令により、露店は惜しまれつつ公道上から姿を消した。このとき露店業者が集団移転して各地に特徴ある店舗が建設された。木造のアーケードがパリのパサージュを思わせる谷中初音小路は、現在は飲み屋中心だが、当初は日用品も扱っていた。橋本会館は河川埋立地に建てられ、靖国通り沿いの繊維製品を扱う営業者が中心となって移転している。●(初田)



右上・谷中にある谷中初音小路。木造のアーケードがめずらしい(写真・川島保彦)  
上・東神田にある橋本会館。長屋型の露店収容では最大規模のもの(写真・渡邊茂樹)



かつて、都電の水川下町停留所があった交差点付近に残る、戦後の看板建築。現在の文京区千石3丁目(写真・中島直人)

## 戦後看板建築は まだ大丈夫？

たくさんの戦後看板建築が未だに現役に活躍している。しかし、商売はすでに豊んでしまったところも少なくない。そして、近年、都心部のマンション開発ブームの影響を受けてか、建物も急速なスピードで失われつつあるようだ。例えばかつて都電の水川下町停

留所があった交差点の周辺に、四軒分とはいえ、共同日覆いを備えた小さな商店街がある。一九五四年築の山川屋酒店の建物を右端として、端正な戦後看板建築が並んでいる。しかし、左端の肉屋の建物はすでに建て替えてセットバックしており、間の二軒で営業していた八百屋、果物屋、畳屋は店を豊んでしまっている。気付かないうちに失われていくものがある。●(中島)

## 今も健在、 木造バラック。

終戦直後の資材が不足するなかで建てられたのが戦災バラック建築。現在の法律では建てられないが、無事に生き残り、風格すら感じさせる。戦災で周囲には草が生い茂るなか、御蔵前書房は一九四八年に建設されている。亡くなったご主人が「どこからか木材を仕入れてこられた」とのこと。「創業昭和二十五年」の看板を掲げた斎藤不動産もまた健在である。●(初田)

左・JR大塚駅南口の商店街にある斎藤不動産。  
下・蔵前にある御蔵前書房。  
両方とも町の顔になっている(写真・初田香成)



## 耐火共同建築の勇姿。

各地の商店街の営業者が足並みを揃え、まちづくりを自論んで建てたのが、耐火共同建築である。巣鴨・とげぬき地蔵の先の共同建築は一九五九年完成。統一してデザインされたファサ

ドがその後の改築で一部隠されてしまったのは残念。蒲田駅東口でも都内最長の間口合計三三三メートルを誇る建物が建てられたほか、亀戸駅北口にも現存する。●(初田)



巣鴨地蔵通り商店街に残る、耐火共同建築。  
統一されたデザインのファサードが特徴(写真・渡邊茂樹)

## 地下鉄ストアから地下街へ。

東京の地下街の歴史は一九三三年までさかのぼる。「地下鉄の父」と呼ばれる早川徳次の発案で「社会に対するサービス本位の副業」として神田駅に須田町地下鉄ストアが設けられた。現

在の靴屋は「終戦後すぐに入居した」とのこと。戦後、初の面的な地下街として浅草地下街（一九五五年）が完成、八重洲地下街（一九六五年）はこれらの集大成と言える。●（初田）



上・神田駅地下にある須田町地下鉄ストア（写真・渡邊茂樹）。下・浅草駅の地下にある浅草地下商店街（写真・川島保彦）

## 時間が積層する商店街。

鳥越おかず横丁は商店街建築の見本市である。震災復興区画整理を経て出来上がった町並みは、戦災で焼けることもなく今に至り、その結果、わずかに二〇メートルほどの通りに震災復興期以来のさまざまな時代の建築が残っている。伝統的な建築様式である出桁造が六棟、戦前の看板建築も五棟以上存在し、戦後の看板建築に至っては数え切れない。写真左下手前の出桁造の建

物（一九二八年築）はもともと米屋で、今でも店内に重厚な精米機が見える（現在は陶器品のギャラリー）。真ん中の菓子屋は一九五七年頃のモルタル塗りの木造建築、奥に見える出桁造の食料品店は一九二七年の建築である。ちなみにその奥には近年建て替えられた四階建ての鉄骨造の建物が見える（店は百年以上続く老舗）。まさに商店街散歩の醍醐味が味わえる。●（初田）

写真4点・鳥越おかず横丁にて。左下の右側の店は、昭和3年築の出桁造の建物。1軒おいた左隣の建物も昭和4年造の出桁造の食料品店（写真・初田香成）



## 要の位置の商店街建築。

黄色いファサードが印象的な「ペーカリーカヤシマ」の建物は本郷宮前通り商店街（文京区）の突き当たり通りの視線が集中する位置にある。一九四八年築、その数年後にファサード部分を増築した戦後看板建築である。商店街はかつての賑わいを失ってしまったが、

この建物がある限り、その記憶が途切れることはない。

言問通りが千川通りに突き当たるT字路のすぐ脇にある大亜堂書店は、スクラッチタイル貼りで関東大震災前の建物と言われている。えんま商店街（文京区）の周囲の建物の多くが高層化しただけに、余計に目立つようになった。●（中島）



左・文京区のえんま商店街にある大亜堂書店。右・同じく文京区の本郷宮前通り商店街にあるペーカリーカヤシマ。ともに、商店街の記憶をとどめる挿尾（写真・中島直人）

街灯、アーケード、アーチ

# 商店街フアンチャーの起源と現在。

夕暮れどき、歩行者の足元をやさしく照らす街灯。雨の日、濡れずに買い物ができるアーケード商店街。商店街名が入ったアーチをくぐるとなんだか嬉しくなる。

## 現

在、都内各所の商店街で見られる統一された街灯やアーケード、アーチなどの路上施設（商店街フアンチャー）の起源は、商店街の組織化が始まった大正期から、商店街の共同施設への助成が開始された一九三〇年代に求められる。百貨店の台頭に危機感を持った商店街が「横のデパート」を標榜して、都市美化に取り組んだのである。

当初の具体的取り組みはネオン装飾や街灯の整備であることが多かった。とりわけ小規模の電灯を多数連ねて一つの照明とする鈴蘭灯が流行。一九二四年に建築家の武田五一の設計で京都の四条と五条間にできたのが初例で、

東京でも神保町をはじめ各地で採用された。よほど印象が強かったのか、「すずらん通り」と名乗る商店街が急増した。現在でも都内各所にすずらん通り商店街が存在し、「東京すずらん通りサミット」なる組織も作られている。

商店街名の由来である鈴蘭灯自体はなくなってしまうところが多い。南阿佐ヶ谷すずらん商店街に設置された真新しい鈴蘭灯が異彩を放っている。戦後、鈴蘭灯に代わる定番の街路灯は出現していない。最近では発光ダイオードを組み込み、支柱そのものが光って見えるという案が一等となった銀座中央通りの街路灯デザインの国際コンペが話題をさらった。



上・立石仲見世商店街のアーケードは、昭和35年に設置された(写真・渡邊茂樹)。左ページ上・阿佐ヶ谷駅南口にあるすずらん通り商店街。同下・吉祥寺サンロード商店街の、スクリーンにもなる個性的なアーケード(写真・川島保彦)

また、街路灯と並んで共同事業の主要となったのは日覆いであった。この日覆いが戦後、アーケードへと発展していく。東京のアーケードは一九五一年三月に人形町商店街で片側式アーケードが、同じ頃に浅草新仲見世商店街で全蓋式アーケードができたのを手始めに普及し始める。当初、他との差別化を狙って建設されたアーケードだったが、一九七〇年代以降、商店街近代化事業により大量に整備が進められ

た結果、商店街を均質化させたという批判を招いてしまう。

こうした危機感から、近年のアーケードには再び個性が求められる。例えば吉祥寺サンロード商店街ではコロンベが行われ、二〇〇四年に新たなアーケードが竣工した。ラスベガスがモデルと言われ、昼間は晴れば開き、夜間は大型スクリーンと化してさまざまな華やかな映像や地域の情報が映し出される。●(中島 初巳)





西小山にある「にこま通り商店街」(写真・渡邊茂樹)。  
左ページ・西荻駅南口にあるアーケード付きの「仲通街」(写真・川島保彦)